黒豹ダブルダウン

特命武装検事 黒木豹介（くろきひょうすけ）

完結編

門田泰明

書下ろし

NON NOVEL

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定(ノン)〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説(フィクション)を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにづれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—366

黒豹ダブルダウン7　特命武装検事 黒木豹介

平成3年9月15日　初版第1刷発行

著　者　門田泰明(かどたやすあき)

発行者　伊賀弘三良

発行所　祥伝社(しょうでんしゃ)

〒101　東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル
☎ 03 (3265) 2081 (営業)
☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印　刷　堀内印刷

製　本　ナショナル製本

万一，落丁・乱丁がありました場合，おとりかえします。　Printed in Japan.

ISBN4-396-20366-7 C0293

© Yasuaki Kadota. 1991

黒豹ダオルダウン7

完結編

特命武装検事 黒木豹介（ひょうすけ）

門田泰明

江西工业学院图书馆
藏书章

NON NOVEL

祥伝社

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

37章 愛 いま甦(よみがえ)りて……7
38章 慕情 軽井沢物語 41
39章 誕生した「黒豹(くろひょう)特殊作戦部隊」 77

40章 激烈なり 二・二六事件 117
41章 打電 ワレ総攻撃ヲ開始セリ 163
42章 地底兇悪要塞(ようさい)の崩壊 213

装幀・中原達治
カバーフォト・吉野　信
本文イラスト・加藤孝雄

37章

愛 いま甦(よみがえ)りて……

1

マーイヤは、朝の木漏れ日の中を、やや俯き加減でゆっくりと歩いた。

彼女の足の下で、落ち葉が、カサカサと物悲しげな音をたてている。

ときおり、その落ち葉の中に、小さな動物の蠢きがあった。

端整な彼女の横顔は、翳っていた。木々の枝々の重なりの向こうから差し込む光が、彼女の白い頬に当たって揺れると、翳りはいっそう暗く深くなるかに思われた。

不意に、鶯が鳴いて、彼女の足が止まった。その一瞬だけ、鶯は彼女の顔から、憂いを奪い去った。

鶯はどうやら、救命救急センターを抱き込むように、枝を差し広げている樟の木の濃い緑の中に、姿を隠しているようであった。

樹高三十メートルはあろうかと思える、その樟の木は、多紀塚開山の別荘にふさわしい、堂々たるものであった。樹皮は艶やかな光沢を放ち、頑丈な枝々には力が漲っていた。

だが、その枝の真下にある集中治療室では、黒木が意識不明のまま二週間目を迎えようとしていた。容態は、ここへ運び込まれたときと、まったく変わっていない。

この二週間の間に、倉脇早善は二度、軽井沢を訪れ、今朝早く、黒木の容態を気にしながら、東京へ戻ったばかりである。

鶯がまた鳴いた。

マーイヤは、広い庭を横切って、樟の木に近づいて行った。足音をたてぬよう、そっと歩いたつもりでも、落ち葉はやはりカサカサと乾いた音をたてた。

その音が気に入らなかったのか、鶯は、それっきり鳴かなくなった。どこかへ飛んで行った気配はないから、息を殺して、じっとマーイヤを見下ろしているのかもしれない。

樟の木のそばに佇むと、集中治療室の窓の向こうに、

黒木の手を握って身じろぎもしない沙霧の美しい横顔が見える。

その、あまりの美しさを認めたくないばっかりに、マーイヤはなるべく、樟の木には近づかぬよう心がけていた。

警護のために、ほとんど終日、こうして別荘の庭で過ごしているマーイヤである。救命救急センターの建物の中へ入っていくのは、一日のうち二、三度、それもごく短い時間でしかない。

ときには別荘の外に出て、近辺を丹念に見て回ることもする。

彼女が肩から下げているショルダーバッグには、長い間使ってきた八連発の自動拳銃ピストレート・マカロバ（PM）に代わって、十五連発の大型自動拳銃ワルサーP88が入っていた。黒木から、与えられたものだ。

マーイヤは、暫くの間、気品のある沙霧の横顔に見入っていたが、小さな溜息をついて、その場を離れた。

沙霧を見つめていると、〝KGBきってのエリート女性〟という自信がぐらつくのを、マーイヤはどうすることもできなかった。沙霧の〝輝き〟は、それほどマーイヤを圧倒していた。黒木と沙霧の間に、割って入りたいという気持ちはあっても、それを実行に移す勇気はなかった。

マーイヤの目には、沙霧は依然として自分の殻に閉じ籠もっているように見えた。

黒木のそばに付きっきりで、食事をほとんど摂らないため、やつれは目立っていたが、不思議なことに美しさは逆に、輝きを増し始めている。

マーイヤが、もう少し沙霧と接する時間を増やしていたなら、黒木を見つめる彼女の瞳に、それまでにはなかった微妙な変化が生じていることに、気づいたであろう。

いま、そのことに気づいているのは、倉脇早善ひとりである。

さすがに倉脇、と言うべきであろうか。

マーイヤは別荘の外に出ると、敷地を囲む建仁寺垣に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

沿って歩き出した。
すると鶯の鳴き声が、追いかけてきた。
「私を慰めてくれているのね」
マーイヤは、頭上を仰いで鶯を探し求めながら、淋しそうに囁いた。
木漏れ日が、彼女の顔に、光の輪をつくっている。
軽井沢の森の中にあって、彼女は妖精のような妖しさを放っていると言うのに、その姿は打ち萎れていた。黒木を補佐していたときの、あの毅然とした力強さは、すっかり影をひそめてしまったかのようであった。
建仁寺垣の最初の角を折れると、獣道のような細い道が森のずっと奥に向かって、まっすぐに延びている。
二体の小さな道祖神が、ほんの数歩あるいた左手の、叢の中にあって、木漏れ日を浴びていた。
一昨日、マーイヤが見回りの際に供えた、名も知れぬ可憐な草花は、すっかり萎れてしまっている。彼女は、それを取り除いて、もう日本で何年も生活してきた者のように、ごく自然に手を合わせて祈った。もちろん、黒木が救われるようにである。
長い時間をかけた祈りではなかったが、端整な彼女の表情は真剣であった。口にこそ出さなくとも、自分の命と引きかえに黒木を助けてほしい、との願いを込めた祈りであった。
マーイヤは、道祖神の前を離れて、歩き出した。軽井沢の森は、夏の前と夏の後が、もっとも軽井沢らしい静けさと緑の美しさに包まれている。この時期は、動物たちの動きも、真夏よりは活発に見える。
建仁寺垣の二つ目の角を折れようとした、マーイヤの足が、ふと止まった。この時にはもう、彼女の右手の親指と人差し指は、肩から下げたショルダーバッグの口金を、音をたてぬようあけていた。
七、八十メートル先の森の中、そこには道などあろうはずもないのに、ひとりの白人の男が双眼鏡を手にして、立っていた。佇んでいた、というよりは、やはり立っていたという感じで、そばの巨木の枝を頻りに仰ぎ見ている。

その枝に登れば、多紀塚家の別荘の庭は、まる見えだ。巨木の位置から考えて、双眼鏡を使えば、集中治療室の様子を見ることもできるかもしれない。

マーイヤは、足音を忍ばせるようにして、白人の男に近づいていった。

年は四十歳前後だろうか。髪の色はブラウンで、温厚そうな顔立ちは、どことなく学者を思わせる。

マーイヤに横顔を見せて、梢を仰ぎ見ているその男は、近づいてくる彼女に、まったく気づいていないようであった。

マーイヤの表情は、黒木の補佐をつとめているときの厳しさを、すでに取り戻していた。

「バード・ウオッチングですか?」

男から二十メートルほどの所で立ち止まり、マーイヤは英語で声をかけた。

男が、びっくりしたような顔つきで、彼女の方を見た。怪しい人物ではなさそうな印象であったが、マーイヤは油断しなかった。

ショルダーバッグの中へ、さりげなく滑り込ませた右手は、ワルサーP88のグリップに軽く触れている。

男は、マーイヤに向かって答える代わりに、まず人差し指を口に当て、それから頭上を指さして見せた。その表情が、いやに真剣であった。

マーイヤは、用心深く男に近づいて行きながら、頭上に注意を払った。男の豹変に備えて、ショルダーバッグの中へ滑り込ませた右手は、そのままだ。

彼女は、男から三メートルほどの距離をあけて、足を止めた。すると男のほうから彼女に近づいて、「もっとこっちへ……」と、英語で囁いた。その囁きかたに、善人らしさがあった。

マーイヤは、ようやく肩の力を抜いて、ショルダーバッグの口金を閉じ、男の言葉に従った。

「あれです……あの三つ叉の梢をご覧なさい」

男の指さす方を見ると、そこにかなり大きな鳥の巣があった。

男は黙って、マーイヤに双眼鏡を差し出した。

彼女は迷った。双眼鏡を覗き込むと、完全に無防備の状態となってしまう。
「オオタカです。日本では特殊鳥類に指定されている鳥です」
白人の男の英語には、癖がなく、なめらかであった。
オオタカは、全長五〇センチ以上、翼開張一三〇センチ前後の大型の鳥だ。産卵期は四月下旬から六月上旬で、青白色の卵を三、四個産む。
そのオオタカが、別荘地帯である軽井沢の森に、巣をつくるのは珍しい。
マーイヤは「さあ……」と男に促されて、双眼鏡を覗き込んだ。
いた。雛を抱いているらしい親鳥が、はっきりと見えた。あたりを警戒するように、首を左右に振っている。目が鋭い。
「軽井沢の森に、オオタカが巣をつくるなんて、ビッグ・ニュースです。でも私は、この発見を誰にも言いません。最近の日本人は、必ず雛を捕えて、お金に替えようとしますから」
耳元で囁く白人の男に、マーイヤは双眼鏡を返した。
「あなたは、軽井沢にお住まいですの?」
「ええ、軽井沢に住むようになって、もう十二年になります。国道18号線を渡って、五分ばかり歩いた所にある小さな教会が、私の住まいです」
「それじゃあ、神父さん? ……」
「ええ。よかったら、今からいらっしゃいませんか」
「いいえ、私は仕事を持っていますから、今は無理です。いずれ、別の機会にでも」
「そうですか。では次の出会いを楽しみにしています。オオタカの巣のことは、けっして誰にも言わないでくださいね」
「お約束しますわ」
マーイヤの返事に、男は満足そうに頷いて、さらに森の奥に向かって歩き出した。
マーイヤは、彼の後ろ姿が、緑の向こうに溶け込んで見えなくなるまで、その場を動かなかった。

足元の木漏れ日の輪が、点滅したので、彼女は頭上を仰いだ。
どこからか飛来した、別のオオタカが、雛を抱く役を替わろうとしているところであった。
それまで雛を抱いていたオオタカが、しっかりと出来た巣を力強く蹴って、いずこかへ飛び去った。
何故かマーイヤは、急に淋しさに襲われて、涙ぐんだ。
吉備高原の、地中深くの坑道から、血みどろの黒木を運び出した時の光景が、脳裏に甦った。
あのときの彼女は、とにかくもう無我夢中であった。その無我夢中が、黒木を救ったのだ。
じっとしておれなくなったマーイヤが、黒木支援を決意して、深い山の平坦地にアパッチを着陸させたとき、地中では黒木が、左下腹部に貫通弾をくらっていた。
マーイヤは、アパッチに備え付けられていた、軽機関銃を手にして、坑道の入口へ急いだ。そして、坑道の入口で、ワルサーP88を手にした沙霧と出会ったのである。それが偶然でも運命でもなく、亡き国枝官房長官の不思議な霊力によるものであることを、マーイヤは知らなかった。
沙霧が吉備高原にやってくる可能性が強いことを、倉脇から知らされていたマーイヤは、彼女が坑道内へ入るのを制し、保護しようと努めた。しかし沙霧は、迷いも恐れも見せず、何か強い力に導かれるようにして、坑道内へ踏み込んだのである。必死で制するマーイヤの存在に、まるで気づいていないかのように。
マーイヤは、仕方なく、沙霧の後に続いた。こうして、敵と激しい銃撃戦を展開しながら、黒木を救い出したのであった。
黒木が、先に多数の敵を倒してくれていなかったら、彼女たちは黒木を救い出すことはできなかっただろう。またマーイヤが、最後の段階で沙霧と分かれ、敵の後方へまわるという作戦をとらなかったなら、黒木だけでなく沙霧の命も危なかったかもしれない。
マーイヤは、オオタカの巣を見上げながら、ふっと思

った。あのとき、沙霧が死んでおれば、黒木豹介は自分だけのものになったのに、と。
そのようなことを考える自分に、思わず身震いしたマーイヤは、うなだれるようにして、その場を離れた。

2

そのころ国立原子核研究所の素粒子研究チームは、倉脇首相の依頼を受けて吉備高原の坑道深くに潜り、V・Nが委棄した例の椀状の装置の解体に、全力投球していた。
超光速粒子タキオンを応用した、彼らの『多次元コントロールシステム』の開発は、最後の段階で難問に突き当たっていた。
人間とか自動車とかの大型のものを、自在に異次元へ送り出し、また引き戻すには、タキオンの発生を極めて長時間、維持する必要があった。彼らは、じつに昼夜を分かたず二百回に及ぶ実験を反復していたが、その難問をクリアできないでいた。考え方の基本は、ポール・ウッドワード博士の論文に、忠実に従っていると言うのにである。
このため素粒子研究チームは、V・Nが残した椀状の装置の解体に、ひじょうな熱意を燃やしていた。
解体を始めて、今日で八日目であったが、解体部分を即日、図面化するという作業のため、当初のスケジュールよりかなり進行が遅れていた。
だが遅れた分、彼らは次々と新しい発見に出くわしていたのである。
いま信馬所長はヘッド・ランプを装着し、常木と阪彦を従えて、椀状の装置の基底部に潜り込んでいた。
常木と阪彦は、国立原子核研究所では、若手のNo.1、No.2と評されている逸材であり、将来を嘱望されている。
「所長、この太いケーブルは、なんだと思われますか？」
阪彦が、縦一メートル半、横五十センチほどの、プラ

スチック製のカバーをはずしたあとに出てきた、二本の黒いケーブルを、ドライバーの先で軽く叩いて見せた。

黒いケーブルは二本とも、直径十センチ近い太さがあって、一方は四十センチ平方くらいの赤いボックスにつながり、もう一方は頭上のスチール製カバーの向こうへと延びていた。

解体して彼らが先ず気づいたことは、カバーが多いと言うことであった。つまり多数の立方体や球体が寄り集まって、この椀状の装置は出来ていたのだ。それらの立方体や球体の中に、びっしりと詰まっている電子回路やレンズや増幅装置といったものは、彼らにとって、それほど難解なものではなかった。

ただ、多数の立方体や球体を用いるという発想は、彼ら素粒子研究チームに、新鮮な驚きと衝撃を与えていた。

「そのケーブル、中は一本で出来ているようかね」

信馬は、自分の目の前にある、小さいが複雑な電子回路を、高倍率ルーペで調べながら訊ねた。

「一本はそのようですが、別の一本は何本かの線が集まって出来ている感触です。二本とも絶縁テープで厚く巻かれています」

「とにかく絶縁テープを、剝がしてみたまえ」

「はい……」

頭上のスチール製のカバーを、はずしにかかっていた常木が、阪彦を手伝うために自分の作業を中断した。

二人は慎重に、絶縁テープを剝がしにかかった。

だが二人はすぐに「あれ?」という顔つきをして、お互いを見つめ合った。絶縁テープは、厚く巻かれていたわけでは、なかったのである。

二度巻きに過ぎなかったテープの下から出てきたのは、二人にとって、ひと目で断熱素材と解るものであった。

「所長、どうやらこいつは、単なるケーブルではなさそうですよ」

常木が信馬の背に声をかけると、接眼ルーペをはずして信馬が振りかえった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb